

オーストリアの秋

さかもと ふ さ

(型絵染版画家、エディター
イラストレーター)



今年十月上旬にオーストリアへ。秋は始まっていた。日一日と木々の葉が色づいていき、寒さも薄手のハーフコートを羽織るくらいだった。まずはウィーンから南へ1時間くらい行ったニーターエーストライヒ州のワルパースバッハ村へ、二頭の馬と暮らすお宅に五泊した。

家主の馬はK a s a (カーサ)、娘の馬がS a b i (サビ)、娘は結婚をしてウィーンに住んでいる。その母親のブリギッテは朝、目がさめるとカーサ、カーサ、ご飯だよ。ここから一日が始まる、出かけてかえってくるとまず、第一声はカーサ、カーサ、ご飯だよ。お腹すいたでしょ。彼女の一日の日課だ。

ブリギッテはご主人とすでに離婚をしている。彼女は馬が人生の全てである。馬以外に興味がない。裏山の森に散歩に出かけた。彼女が馬の手綱を弾いてくれて、娘がカーサに乗った。私に何度も乗ってみるかと進められて挑戦、乗るときも降りるときも大変、乗ってはみたがゆっくり景色が眺められず、傍観者でいる方がよい。カーサの絵を描いてほしいと頼まれた。

夢見る男たち

ラジオで小耳にはさんだ話なので、全体はどうもアヤフヤなので恐縮なのだが、奇妙に記憶に残ったので書き留めておきたい。

「大相撲」に、シコ名を「アムール」という力士がいるらしい。どのような漢字を当てるかは知らない。が、その経歴が面白い。

どうやら国境近い、アムール河沿いのロシアの寒村の農家の若者が、ある日、たまたまラジオかテレビで日本の大相撲のことを知ったらしい。途端にこの若者、天の啓示のごとく、これぞ我が天職だーと思ったという。



以来、寝ても覚めても、大相撲への夢はふくらむばかり。ついには夢断ちがたく、東海の小島なる日本に渡来し、相撲界に入門したと云うのである。金を溜めて航空費をつくり、ハンチングをかぶり、カバンかバックを手にした若者の姿が目に見えるようではないか。おそらく若者の胸は、膨らみにふくらんでいただろう。

で、その後の彼はどうなっていただろうか。研鑽練磨すること九年―どれほどの地位になったかは、残念ながら聴き漏らした。その後、注意していたのだが、ラジオでもテレビでも君の名

は見当たらないところを見ると、すでに廃業して帰国し、アムール河畔の我家で、日本の大相撲の歓声を懐かしんでいるのかも知れない。

この若者に対する相撲解説の親方の言葉は、

「いや、どうも、ワシにも彼ほどの度胸があるかどうか怪しいものですわ」
この身体の大きな親方にして、裸一貫、未知なる東海の小島に渡来する度胸はないというのである。

もつとも、この話、珍しい話ではないのかもしれない。なにしろ最近では、モンゴルを始め、ブルガリア、グルジ

永岡 慶之助

(作家)

ア、ロシアはおろか、エジプトから入門する若者もいるのだから。

アムール君の話で思い出したのが、十年前ほどにもなろうか。A新聞紙上に、ラジオを耳に当てる、チェコかどこかの国の老人のスナップ写真が割合に大きく紙面を飾っていた。題して「音に魅せられて」。

このオジさんの場合も、ある日、聴き馴れない、不思議な音に、どうやら言葉らしいが、むろん皆目わからない。が、奇妙にその音に心ひかれ、忘れがたい響きとなって心に残った。

その不思議な響きを持った言葉を日本語と知った彼は、街を駆け巡り、ようやく日本語の参考書を手に入れ、夢中になって練習するかたわら、街で一番よく電波が入る高台に、ラジオを抱えて通い出した。

彼に語学の才能があったのか、それとも恐るべき執念の努力がみのつたのか、ついにラジオから流れる日本語を解せるようになった。彼はリスナー票を放送局に送り、ついには、このよう

に新聞紙面を飾るまでになったというが、人間、いつ、どんな夢にとりつかれるか分からぬと、不思議な思いにうたれたものであった。

一体、異国の人の耳には、日本語はどのように聴こえるのであろうか。チェコの老人のように、人の心を魅了するような心よい響きなのであろうか。興味深いものがある。

幕末の頃、フランスのパリに、怪しげなる日本語を喋る青年がいた。名をロニイといい、どこで覚えたか分からないが、単語を並べただけのような日本語だが、とにかく注意して聴けば理解できたという。このロニイ青年、まだ見ぬ東海の小島、日本に憧れて、日本人と見れば話しかけ、世話を焼きたがった。初めは警戒されたが、別に悪意がないと知れてからは、日本人界の人気者になったとある。聞こえるようではないか、「アナタ、ドコ、ユキタイ、オモイマスカ？」という彼のカタコトの日本語が。

むろん、異国に夢をふくらませたの

は、彼等ばかりではない。日本の若者とても負けてはいない。若き幕臣奥平直次郎二十三歳が、当時横浜にあった幕府創設のフランス語学校に学んだ上、幕府派遣の留学生として渡仏。パリに遊ぶこと三年半。多感なる青春の日々を送っている。

慶応三年、幕府の親善使徳川民部一行が南仏リヨン駅に到着した際に、彼が駅頭に出迎えたことも、その日誌によつて知ることができる。なお彼は、よほど筆マメだったらしく、次のようなパリ一日遊記を書き残している。それを次に掲げおく。

「一日、北部サンマルタン運河二遊ブ。水路二石灰舟ナラビニ、ワイン積載ノ舟ナド、連ナリ舳(もや)イマツ。水門開ケバ数隻通過スルモ、再ビ水門閉ザサレ、昼夜、通過二幾刻カラ要スルコト珍シカラズトイフ。」

力士アムール君やグルジア、ブルガリア、モンゴル出身の諸君は、果たしてどのような回想記を残してくれるだろうか。

親分

山本千明

(ECC英会話講師)

庭の草刈のあと、柔らかくなった土の上を小走りで逃げる茶色の昆虫を見つけた。慌てて追いかけて、右手でそつとつまみ上げ、左手に乗せると優しく包み込んでみる。その小さな生き物は、握った私の手を内側から「ナニクソ！」とこじ開けようとしてシヤベルのような前足でギリギリと掻き分けてきた。その感覚は、五十年前に味わったものと全く同じものだった。

眩い日差しの中、背丈ほどの草が生い茂る土手で、兄の背中を追いかける幼い頃の私が居た。

私には対称的な兄が二人。上の兄は九歳年が離れ、物心つく頃には既に「大人」に見えた。常に机に向かつて勉強をしている印象があり、成績表にも見事に「五」が並ぶ努力型の優等生。対して四歳年上の兄は、白いランニングシャツ一枚で野山を駆け回る、直感型野生児。珍しく机に向かってい

ると思えば、消しゴムと彫刻刀でリアルな「犬」を彫り上げていた。成績は「一二一二」の行進曲。

下の兄には「よくかわいがってやってた」と言われたが、魚を取りに行く時はバケツを持たされ、虫を取りに行く時は網を持たされ「かわいがっていただいた」というよりは、単なる「子分」扱いだっただけ。

兄の「獲物」を一時確保するのも「子分」の重要な「責務」である。「これ持つとけ」と言われるままに、この従順な妹は、気がつけば「何でも持てる子」に訓練されていた。手の平よりも大きな蛙は、お腹を上にしてゆっくりなでてやれば、催眠術にかかったように大人しくなり、蟬やバッタも背中をつまんで難なく持っていられた。

ところがある日、「ほら」と渡された虫は少し勝手が違っていた。三センチ程の小さな生き物。急いで左手に包

み込んだ、次の瞬間、閉じた手の隙間からグイグイと顔を突き出して来る。

慌てて右手を被せて捕えるが、また指の間をギリギリ掻き分けてひよこつと顔を出す。驚いて、鱈を捕えるように左手右手と交互に丸めてひたすら追いかけた。それでも、その力の強さには勝てず、ついにピョンッと飛び出して、地面に落下。そのまま超スピードで土を掘って地中に姿を消してしまった。

呆気にとられる私の手には、その小さな虫の中に秘められた予想外の力強さ、内側からグイグイと押し広げられる前足の感触が鮮明に刻みつけられた。そして今、時を越えて、正にその感覚が手の中に甦って来たのだ。

野山を駆け回っていた兄もやがて成長し、真面目に勉強さえすれば、実は「できる子」だったという事も高校受験で証明して見せた。その後、持ち前のユニークな感性を生かして芸術畑を目指すようになる。

芸大受験時は、「チョコを配ってくれたけん、やっぱ私立大はサービスえ

えなあ、て食べよったら、それをモチーフにして絵を描け、て説明されたんや。題材食べてしもたあ！アツハツハツ」そこでこの兄、「しゃあないから思い出しながらこんな感じで描いたんや」と見せてくれたのは、包み紙から勢いよくチョコが飛び出す立体的で粋な構図のデザイン画だった。

モチーフ無しで絵が描ける才能を買われてか、めでたく芸大にも合格し、在学中に生涯の伴侶も見つけ、卒業、就職、結婚と花咲く人生を謳歌（うたが）していた。腕白な二人の息子達と魚や虫を捕えて遊ぶ姿は少年のままで、義姉には「息子三人」と笑われることもしばしば。そんな幸せに満ちた運命の転換期は突然にやって来た。

義姉は兄の強さを信じて「告知」を選んだ。兄が自分の病名を知った直後に我家の電話が鳴った。受話器を取るといつもの明るい声が聞こえる。「白血病だったんやなあ。知らなかったわ」一点の曇りもない、澄んだ青空のような声だった。「敵」の本性を知って「闘

う」意志を固めた兄は真底強く逞しかった。

奇跡的に兄弟三人揃って同じ「型」だと判明し、長兄からの骨髄移植を受けることが決まる。

ただ、その前後の治療は想像を越えるものだったようだ。本人が「善意に満ちた拷問」と笑いながら呼んだ無菌室での治療。吐く物が無くなってもさらに続く烈しい吐き気、口内炎だらけで爛れた口の中。倦怠感と「死んだ方がマシ」と思うほどの腹痛。それらの苦痛に加えて、水を一口飲む前に三度のうがい。床に落ちた物を拾うこともNGという厳しい規制。家族の入室も許されない。通常、「四十日」が精神的限界と言われるこの「独房」に、「君は強いから大丈夫！！」と主治医に見込まれて（？）百日も「お泊り」させられたのだ。さぞかし参っているだろうと思いきや、兄から届いた手紙を見れば、毎回自分を「ネタ」にした割（ひ）軽極らないさし絵が描いてある。

「髪が抜けちゃったケド、まゆ毛は

半分残ってるよーん」などのコメント付きで、心配する前に笑わされてしまう。

「死ぬのは恐くない。どうせいつか死ぬんだから。でも『その日』までは生きて生きて生き抜いてやる」そんな言葉を実証して見せてくれた。

私は「親分」の命を引き留めようと、右手左手、あの手この手で捕えようと必死だった。

二年后、兄、三十九歳の初夏。私の両手の間をスルリと抜けて、土の中に消えるがごとく宇宙空間に溶け込んで行ってしまった。

私の手の内側に、「宿命」を「脱却」しようと力の限りこじ開けた両腕の強さの感触を刻みつけてー。

「ぼくらはみんな生きている
生きているから歌うんだー

〇〇〇だって、オケラだってー」
五十年前、兄から手渡されたあの虫の名が入っているこの歌を、私は時々口ずさむ。

曼珠沙華



宮本 富夫
(高松大学 教授)

曼珠沙華の花には、なぜか心惹かれる。緑あふれる晩夏の空間に真っ赤に映える色のせいなのか。色づき始めた

稲との対比がいいのか。やさしい風をうけると、あたかもワルツを踊っているように感じさせる花の動きにあるのか。暑さが和らぎ始める彼岸の頃に、「涼しくなりますよ」と、秋の到来を告げるようにいつせに咲きはじめることによるのか。心に問いかけるも、正直いってよくわからない。幼少の折、花のついた花茎を交互におり、首飾り状のものをつくり、よく遊んだ。何とはなしに舐めた指先から、花茎を折ったさいに浸出する液がかなりの苦しみをとまぬうことを知った。あてやかな赤と苦み。このことが心に刻まれ、一

つの原体験となっていていことから心惹かれるのかもしれない。

我が家の東側を南北にはしる用水路の管理道とその岸に、曼珠沙華のちよつとした群落が育つ。咲いた花の赤と草の緑との対比がバランスよく見えるようにと、毎年のことながら、草刈の時期をいつにするか、ほんの少しい具合に花をつけてほしいと願うこちら側のわがままな意が届くのだろうか。真っ赤な絨毯を敷き詰めたような咲きようを毎年のように楽しませてくれる。そしてこの群落は少しずつ密度をあげ、生育域を拡大している。いつ

の頃からか、カメラを片手に訪れる人も出てきた。どなたかが心動かされ、写真に収めた風景が眼を惹くことになったのだろう。校区のカレンダー二〇一二年版に、この群落のスナップショットが採用された。

今年も夏季の雨が少なく、曼珠沙華の開花が遅れるのではないかと内心ヒヤヒヤさせられたが、杞憂に終わった。鱗茎に開花のためのエネルギーがたっぷりと蓄えられていたのだろう。開花時期直前の雨がもたらした恵みを受け、丈夫な花茎を伸ばし、例年より少しりっぱな花をつけたように思う。

曼珠沙華は不思議な植物であるところづくと思う。花をつけるときは、花茎のみで、葉はつけない。花茎がしおれ始めると、葉が出てくる。葉を支える茎はもたない。鱗茎から叢生する形で葉を出す。しかも、他の草が枯れ始める時期に葉を伸ばす。曼珠沙華の群落のあたりは、一面その葉に覆われる。秋から翌春にかけての夏に比べ格段に弱い太陽の光とはいえ、光を一人占め

にする。少しずつを巧みに利用し着実に蓄える。春から夏にかけて伸長する植物は、太陽から届くたつぶりの光を巡って過酷な競争下におかれるが、曼珠沙華にはその心配がなさそうである。他の草が葉を伸ばし茂らせる頃になると、曼珠沙華の葉は茶色となり枯れる。たつぶりとエネルギーを蓄えた鱗茎は眠りにはいるようにみえる。そして、彼岸の頃に、時期をまがうことなく花茎を伸ばし、花をつける。鱗茎のどこに時をカウントする仕掛けがはたらいているのだろうか。光を巡る競争をたくみに避ける戦略を持ち合わせていることと併せ、不思議でならない。

里地に生育し、人里を離れた場所には生育していないという曼珠沙華。弥生時代に稲作とともに大陸から伝えられたといわれる（鈴木昶編『身近な漢方薬材事典』）。私の住む地域では、水田の畦に多く生育する。種子ができないので、種子による伝播は考えられない。

鱗茎を、先人が畦に植えたのだろうか。モグラ対策だったのだろうか。野ネズミ対策だったのだろうか。觀賞用だったのだろうか。先に述べた苦みと関係することであるが、鱗茎をはじめ植物体にはアルカロイドが含まれている。しかもその成分は根から周囲に発散されているという。このためか、曼珠沙華の育つ畦にはモグラのトンネルがほとんど見つからない。水田にとつてモグラは嫌な存在である。餌を求め、いたるところにトンネルをつくる。このトンネルから、水田に導入した水が漏出する。水は漏出しながら土壌を削るので、まかり間違うと水田が陥没する、畦が崩壊する事態となる。曼珠沙華は、モグラを寄せ付けないようにと、結果的には作用しているのだろうか。野ネズミについては、よくわからない。今期の我が家の水田では、コンバインによる刈り取りが始まると、上空に舞うトビが、コンバインがもたらす振動と音で跳びだすことを余儀なくされた野ネズミ疾風の如くさらっていつ

た。丸々とした野ネズミはトビにとつては恰好のごちそうらしい。野ネズミの跳びだしは、なぜか畦に近いところではなく、田の中心部に近いところが多く見られた。畦に曼珠沙華が育つことと関係しているのかもしれないと、想像をめぐらせるが、真相はわからない。

ところで、曼珠沙華は太陽からのエネルギーが多く降り注ぐ夏期において、雨がほとんど降らなくても水不足の影響を受けにくい。日照りなどで稲の収穫が危ぶまれるときでさえ、鱗茎はエネルギーをすでに蓄えているため、問題が起こりそうにない。アルカロイドを取り除く方法さえあれば、鱗茎に含まれるでんぷんを利用することができる。急場をしのご食料、救荒食となる。万が一の際にも役立たせたいという先入の思いが、曼珠沙華を畦に植えさせたのかもしれないと、想像をめぐらし、先人の暮らしの智慧に、頭が下がる。

小説風・江戸神仏歳時記 (26)

千葉県市川市・真間の「手児奈霊神堂」



郡 順 史

「先生、変じゃないですか？」

横から助手のH君が声をかけてきた。喫茶店で新聞社の記者と神社めぐりの話をしていてる時である。

「先生、今度、真間の手児奈霊神堂へ参詣にいらっしゃるといふ企画なのだそうです」

「そうだよ」

「変じゃないですか。この江戸神仏歳時記の連載企画は、表題にもあるように「江戸」となっているのに、手児奈姫の神堂の在る所は千葉県の市川市ですよ。シリーズ表題にはずれています。かわらないのですか？」

「かわわない。なぜなら千葉の市川市は、江戸時代は下総國東葛飾郡ごおりの市川であつたが、江戸に最も近く、江戸との玄関口くち、台所口ちのようなものであり、江戸住民たちもお役所の行政上はともあれ、人間的には余り差別感を持っていなかったようだ。つまり、仲が良かった、というわけだ」

「なるほど。市川も江戸の内、というわけでございますね」

「それに今回訪れる真間の手児奈姫は、遠い萬葉時代の昔から、絶世の美人で近よれば芳かぐわしい香りがただよい魂がとろけるほどであったという神

女のような女性であつたという。」

「つまり男のあこがれの女、というわけ」

「そうだよ。男性にとつてのロマンの香り高い永遠の女性を訪れてお参りしようというのだ、江戸も市川もあるかね」

「ありませんね。古く遠い万葉の歌人たちもそのロマンにあこがれ、さかんに和歌をよんだのでしようからね。行きましよう、行きましよう。胸がどきどきしてきました」

「では、あそこに待機していらっしやるボランティアの人によく聴いてきて案内してくれたまえ」

はい、と答えて日君は駅前のボランティア待機所に走って行った。

市川市では数年前から街全体を万葉の里、いやしの街として名を高めようと、志のある人々が集つてボランティア団体を作り、街を訪れ案内を乞う人々に無料で案内や説明をして街全体をロマンの郷としての優美さと平和と安心をあふれさそうと努力しているという。その評判は、親切で丁寧で必ず大満足を得るといわれている。

聞いてきた所では、手児奈姫のお堂は、徒歩で十分や十七・八分はかかるという。

あいにく足が健全ではない筆者としては、

十五・六分の徒歩は辛いし困難だ。そこでタクシーを利用する。

市川市は先程も述べた如く、古い街である。大名など住んではいかなかったから城跡などはないが、昔ながらの狭い道で街が構成されている。

タクシーはその道を走る。余りスピードを出さない。そのほうが良いのだが、すぎ去つて行く町並は実に落着いて優美である。商店もこんなに落着いていて商売になるのかな、と思うほどであつた。

折からの秋晴れの天候、この道をのんびりとはこぼこ散歩がてらに歩いて行つたら、さぞや気持ちよからうに、とふと思う。

五、六分走つたらうか、小さな川に出あつた。江戸川から別れた真間川である。このかたわらに真赤な小さな小さな橋がある。市川名所案内に出ている「真間の継ぎ橋」である。何と変わった風情で可憐ですらある。

運転手が車を停めて、

「ここで降りられたらいいですよ。その入江橋を渡つて行くとすぐ右手に手児奈神社が見えますから」

と教えてくれた。

有難う、と禮を述べて言われた通り小橋を渡る。

すぐに赤い赤ん坊とも言うべき「継ぎ橋」が目の前に。

かたわらに「つぎはし」と書かれた石碑が立っている。そして、赤い橋に手を触れたかったが遠慮して渡る。渡るといふ言葉が恥ずかしいほど短い、しかし一種の胸に感動のようなものを覚える。なぜだろう。

手児奈靈神堂の神前へ出る。

思った以上に立派、と言うのはおかしいが、おのずから神氣に満ちあふれていて、ごく自然に手を打ち頭を下げる。そして、この神堂をこのように美しく尊く祀り保持して行っている多くの代々の人々の、信仰心と努力にも頭を下げる。やはり日本人は神の國の民族、信仰心は、何千年、何百年と、親から子へ、子から孫へと伝えられていつてきたからの、その心あつてのこの神堂であろう。しかしそれにしても、これだけの長い長い歴史を経てもなお人々のあこがれと信仰の心を失わない手児奈姫とは、どのような人なのであろう。どのように美しく光り輝く人であったのだろうか。そしてどのような事をして人々の信仰を得たのであろう。

次章にその伝説と、あこがれを抱いた万葉の歌人たちの和歌をえらんでみよう。

二

手児奈姫は、万葉集が編あまれた時代すなはち宝龜から延暦（紀元七七〇―八〇五年）ごろに下総國葛飾郡市川に産まれた、と言われている。名前は手児奈とよばれ、出生の瞬間、一種の光を放ったので取り上げ婦はうしろにひっくりかえるほど仰天したという。

家柄は、二、三代前までは都でそれなりの身分にあつたというが、手児奈が出生した時分は、貧しくなり手児奈自身も自分でみずから毎朝水汲みをやつたというほどであるから、他人から手児奈姫と、姫よばわりされた一方、一説に他家の雇よとわれ女中であつたという説もあるほどゆえ、いづれにしても裕福な豊かな生活ぶりではなかつたのではなからうか。

それにしても手児奈の、出生、生家、身分、年齢、はてはその名前とてすべてが伝説伝説のたぐいで真実の事は何一つわかつてはいない。みなどれものが、後世によるその美しさからの、あこがれから創作話されたもののおようである。

手児奈が、その姿体の優美さ、輝いて余りある美貌、男の胸魂をとろかす不可思議な神香を發する身を、人々の眼にさらけ出すようになったのは、彼女が十四、五歳の頃ではないかと言われている。

むろん水汲みの姿である。多分彼女は頭に桶、右手に小さな手桶を下げて、眞間野の井とよばれた井戸へ毎朝水汲みに通った。(清輔奥儀抄より)
その姿をある朝、村人の男性が見つけ腰を抜かした、という。むろんその輝くばかりの美しさにである。

男性はだまっていればよいものを、その事を村人の誰れ彼れとなく触れまわった。

光り輝くほどの美貌の女性、と聞けばまず興味を持たない男性はいない。次の朝から村人はむろんの事、噂を身にした遠近の男性どもも「一眼見たい、拝みたい」と、興味津々、眼を輝かせて、早朝、眠い眼をこすりこすり駆けつけて来て、やがて人垣さえ作った。

ただここで感心するのは、集って来た男性の中には、当然飛び抜けた好色の者や乱暴者もいただろうに、手児奈姫に野卑な下賤な声をかけたり、往き帰りを襲ったりした者がいなかった、というより嫌な話として伝えられていない事である。葛飾の男どもだって、美貌にはあこがれても野卑な男は一人もいなかった、というわけもなからうに。手児奈は、こうした環境の中で、毎朝々々男どもの注視をあびながら、三年、四年と水汲みを続けた。

その間、彼女はただの一度も集った男どもへ姿体も視線も向けたことはなかったという。従って口もきかなければ、微笑とて見せたことはなかったらう。

それでも評判を聞き、「一眼見たい」と、遠近を問わず毎朝一人二人と人垣の人数は増えてゆく。遂には遠い江戸からも噂を聞きつけて泊まりがけで来る者もいたというから、ただ凄いいという以外、言葉もなからう。

そのくせ彼女がどこに住み、どんな身分の家の娘かも知らないのである。

「あの人は昔は高貴な家柄のお姫さまだ」

「お名前は手児奈といつて、生まれた時からあのようによい香を発し、光かがやいていたそうだ」
口々にそい言いあい、後にはみんな信ずるようになったが、真実はいずれも見物の男どもの勝手な創作であるという。

ともあれ、こうした噂、評判が、やがて京へも伝わり、俄然興味を抱いたのが、京の歌人たちであつた。

「馥郁たる良香を発ち、天女も及ばぬ美貌を持つ女性とはどのような女性なのであらう」

ここでも男である限り極まわりない興味を抱き噂しあつた。当然一眼見たい、拝みたいと思つた

であろう。

だが、関東、武蔵國は当時は京から千里も離れた妖怪化物が出る荒地と認識され、行けても半年も一年もかかると思われていたので、とても行って手児奈姫の実物を視るといふわけにはゆかなかつた。

そこで彼等は、そのあこがれを夢に托したのだった。そのうちの「万葉集」に掲載されたものより二、三を拾ってみよう。

山部赤人

「われも見つ人にも告げむ葛飾の眞間の手児奈が奥津城処」

高粟虫麻呂

「勝鹿の眞間の井を見れば立ち平して水汲ましけむ手児奈し思ほゆ」

作者未詳

「足の音せず行かむ駒もが葛飾の眞間の継菓やまず通はむ」

いかがですか、いずれの和歌も、葛飾の眞間の風景、手児奈の美しさが眼前に彷彿としてきましよう。これが行きもせず視もせずには作歌したのだというから、ただただ歌人のその想像力、作歌力に感嘆させられるばかりである。

三

だがここでもう一つ忘れてならないのは、当時ならびにその後の世代に渡って残した、上総、下総、安房のいわゆる現在の千葉県の、関東ならびに東北に遺した文化的寄与功績である。

先に記した如く、平安朝時代までは、箱根の山の向こうは妖怪変化が住むと恐れられていたのだ。

それは嘘だが、たしかに関東、東北は旅をするにも命がけであった。山賊、強盗などが横行し、すぐ旅人を殺害して金品衣料などを奪つたからである。強盗、山賊を妖怪と見やまつたのであろう。

だが、噂の通り関東は氣風が荒かつた。殊に戦國武者はたしかに強かつた。関東武者、鬼荒武者などとよばれ敵対する者に恐れられたのは、平家、源氏が跳梁した時代であつて、殊して平家は、平将門の敗死後は、武戦の虚しさを悟つたのか、「一所懸命」という言葉を口にするようになり、京の平清盛の死以降武戦から遠ざかつて行つた。

一所懸命とは、自分の領有している土地はたとえ狭くとも命がけで護るが、他人の領土は決して欲したり侵したりしない、それよりも自分の領土内で一所懸命に働き、つましくも心豊かに暮す、という思想である。今日でいう平和主義とでも言

うべきか。

これに反対の千葉氏とか里見氏など剛勇でできた武将たちは自ら減んでゆき、農耕などを主体とした人々が残った。

江戸ならば関東東北の人達に人間的に文化的に影響を与えたのは、この上総、下総の人たちである、という評価が歴史的にある。

たとえば江戸、この地に最初に着目した大田道灌は、江戸を関東一の要地にしようとして着目した。だが、人手が足りない。そこで上総、下総の人々に眼をつけ声をかけた。兩國の人々は道灌の期待に応じて懸命に建設に働いた。しかし道灌の失格で頓挫。

次に徳川家康が道灌と同様に江戸に着目、同じく兩國の住民を主として声をかけ建設に働かせた。これは上々であった。江戸は関東はおろか日本一の都市に生長した。

都市の形のみではない。下総、上総の住民の影響は、言語文化にも驚くほど強烈に影響を与えたのである。

関東弁、東北弁、そして江戸弁、今こそ江戸弁つまり江戸っ子言葉は減んでしまったが、江戸弁の原点は千葉弁だったといわれているのである。つまり江戸へ出て来た千葉人が互いに千葉弁で

語り話し合う。それを聞いている他國人が少数のため、その言語、表現を真似て千葉弁を喋る。そしてやがて定着しその傾向が次第に東北地方へ移向していったというわけ。

話を手児奈姫に戻そう。

筆者が手児奈姫の御霊堂の前に立って、しみじみと感動し、人間の心の美しさ、日本人の惻隱の情の篤さ深さ、そして日本國の風土の暖かさ豊さ人間に及ぼす無限の力、などであった。この事は先にも触れたが、何度触れてもそのたびに感動をあらたにするものだ。

考えてもみなさい。手児奈姫の逸話伝説は、千五百年、あるいはもっと古い話なのである。普通なら消えても不思議ではない。

それがたとえ、ふと、人の心を打って、徳川時代になつてからとはいへ、霊堂を作つて手を合わせる。そしてその信仰、禮拜が、親から子へ、子から孫へと引き継がれて行き、御霊を手入れし、造り直し、十月十日には毎度親子孫、そして近在近郷の人々が寄つてお祭りをする。これが十年、二十年ではなく、何百年と、百年の単位で引き継がれて来たのである。単なる信仰ではない。連続たる人の心と心のあこがれ、つながりである。こんな美しい心のつながりを持った民族が、世界に

いるであらうか。

お守り続ける千葉県千川市の市民が、ロマンだ、萬葉（心）の里だ、と誇りに思い、他國人にも拡めようと思うのは当然ではなからうか。

もっとも現在は、他の神社、神々にならってか、手児奈姫の御神体を、安産、子育て、子供の病氣治療、それから夫婦円満、家庭平穩、更には恋愛結婚成就と、主として子育て、男女の愛の守り神としての御利益をうたっているが、しかし男性の視線に一種の恐怖をおぼえて入水して自ら死を招いた手児奈姫の心情をみると、ちよつと違うのじゃありませんか、と一言口にしたくもなるが、心広い手児奈姫の事ゆえ、あの幽遠な微笑を浮かべてだまって首肯うなづいているのではなからうか。

ともあれ千葉縣市川市、近いところでもあるゆえ、一度行って、姫の御靈堂に手を合わせても決して損にはならない。いえ、豊かなロマンの心を貰えます。お参りする事を、心からおすすめします。

— 以上 —



(表紙説明)

■三木の獅子

鰐河神社の大獅子。記録に残るだけでも百五十年の歴史を持つ。鰐河に限らず三木の獅子の伝承には、地元で働きながら獅子を伝え守り続けた安西哲夫さんの力も大きい。

鰐河神社 代表 安西 弘

天野神社 代表 宮井 忠

氷上八幡神社 代表 熊野正美

「酒林」随筆特集 第八十五号

平成二十五年一月一日発行

発行人 西 野 信 也

印刷人 株式会社 太陽社

発行人 西野金陵株式会社

高松市魚井町二番地八

万一乱丁・落丁がありましたら、ご一報下さい。

西野金陵株式会社



■酒類部各事業所

- 【本 店】
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133
【高松本社】
〒760-8544 香川県高松市亀井町2-8 ☎087-835-4133
【高松支店】
〒760-0064 香川県高松市朝日新町33-40 ☎087-851-4133
【観音寺支店】
〒769-1613 香川県観音寺市大野原町花稻1071-1 ☎0875-56-3133
【丸亀支店】
〒763-0083 香川県丸亀市土器町北1-70 ☎0877-23-4133
【徳島支店】
〒770-0944 徳島県徳島市南昭和町3-53-4 ☎088-653-4133
【松山支店】
〒790-0925 愛媛県松山市鷹子町546-1 ☎089-975-4133
【岡山支店】
〒701-0221 岡山県岡山市南区藤田錦564-209 ☎086-296-2136
【洲本支店】
〒656-0012 兵庫県洲本市宇山3-5-28 ☎0799-22-0788
【大阪営業所】
〒565-0824 大阪府吹田市山田西2-1-14 ☎06-6877-2671
【東京営業所】
〒134-0083 東京都江戸川区中葛西4-6-12 ☎03-3686-4133
【多度津工場】
〒764-0028 香川県仲多度郡多度津町葛原1880 ☎0877-33-4133
【琴平工場】
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133
【金陵の郷】
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133

■化学品事業部各事業所

- 【大阪本社】
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-2444
【大阪支店】
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-2441
【東京支店】
〒104-0032 東京都中央区八丁堀4-9-4
西野金陵ビル9F ☎03-3552-3441
【名古屋支店】
〒450-0002 名古屋市中村区名駅4-26-13
ちとせビル5F ☎052-561-5531
【北陸営業所】
〒918-8231 福井県福井市問屋町3-815 和中華ビル1F ☎0776-24-0967
【上海西野貿易有限公司】
中国上海浦東外高橋保稅区基隆路6号 ☎021-6278-9549
【NISHINO KINRYO (THAILAND) CO., LTD】
159/40 Serm-Mitr Tower 26th Fl. Room No. 2606, Sukhumvit 21 (Asoke) Rd. Kwaeng
Klongtoey-Nua, Khet Wattana, Bangkok 10110 ☎021-661-7014~7015



西野金陵株式会社
四国・琴平